

現在、地獄沢入り口には、
由来書き（右の写真）が立てられています。

地獄沢の由来（全文）

この小高い丘を登ると正面に見える沢が、嘆願沢、
刃拭き沢、地獄沢と続く地域である。
小生瀬村は、佐竹氏の善政で村民は、佐竹を追慕
していたが、秋田へ国替えされた。



その後水戸藩となり年貢を徴収され支払ったが再
度の徴収に激怒し偽役人と言って竹槍等で殺害した。
それを聞いた水戸国老や頼房が小生瀬村民を襲撃せよとの命に数百の兵を率いて小生瀬
村民を斬り殺し逃げ場を失った老若男女は、この沢へと逃げ込んだ。

役人が後を追いかけて行き止まりの沢で斬り殺されたその処を地獄沢、刃を拭いた処を刃
拭き沢、助けを求めた処を嘆願沢と言う。字名が実在している。
歴史的証しは無いが代々言い継がれている。
現在、地獄沢は、荒れ果て尋ねるも困難である。

平成二十年三月
生瀬地区文化体育振興会

●さて、その水戸藩史について『ウィキペディア』では、次のように書かれています。

水戸徳川家以前（歴代藩主一覧を参照）常陸は佐竹氏が豊臣秀吉によって支配をそのま
ま認められていたが、関ヶ原の戦いの際に佐竹義宣（よしのぶ）は徳川方に加担しなかつ
たため、慶長7年（1602年）に出羽久保田21万石に減転封された。

佐竹氏の後、水戸城には下総佐倉藩より徳川家康の五男松平（武田）信吉（のぶよし）が
15万石で入ったが、翌1603年に信吉は21歳で病死した。

信吉の死により翌月、家康の十男で当時2歳の長福丸（徳川頼宣とくがわよりのぶ）
が新たに20万石で水戸に入封する。1604年、5万石の加増を受け25万石となる。
1606年、頼宣は元服した際に常陸介に叙任（じょにん）されているが、1609年に駿河・
遠江・東三河（駿府藩）50万石を与えられて転封し、1619年には紀州藩55万石に転封し
た。頼宣は紀州徳川家の祖となった。頼宣は2歳から8歳まで水戸藩主であったが、この
間一度も水戸に入っておらず、駿府にて家康の膝元で過ごしたといわれている。
実務は財政面を蘆沢（あしざわ）信重が、行政面を関東郡代伊奈忠次が執った。

1607年（1602年、1615年とも）の秋に、小生瀬村（現：大子町小生瀬）で、年貢を巡る農民と藩役人の行き違いにより、藩が小生瀬村の住人を皆殺しにする事件が起こった。

藩の役人が年貢を取りに来て農民は納めたが、また別の役人が年貢を取りに来たこと（年貢の二重取り）に対して怒った農民たちが、後から来た役人を偽物と判断してその一人を殺害した。

これに対し10月10日、蘆沢信重が藩兵を出兵させて生瀬村の農民を皆殺しにしたという。この事件に関しては、藩の公式記録には一切触れられず、伝承と関連した地名が残るのみである。とあります（部分掲載）。

解説：蘆沢信重（あしざわ のぶしげ）：デジタル版 日本人名大辞典+Plus の解説
1577-1647 織豊-江戸時代前期の武士。天正(てんしょう)5年生まれ。徳川家康の命により家康の子武田信吉(のぶよし)につかえ、慶長7年信吉の転封(てんぽう)にしたがって常陸(ひたち)水戸にうつる。のちに徳川頼宣(よりのぶ)、初代水戸藩主徳川頼房(よりふさ)につかえ、家老となる。正保(しょうほ)4年死去。71歳。通称は一万、宗六。

さらに、調べて見ますと、約40年前に、小生瀬村一揆（生瀬騒動）について、朝日新聞の日曜版に掲載された特集記事がありましたので、紹介します。

●小生瀬村・密封された「血の祝日」

「特集：日本史の舞台 1981年（昭和56年）6月28日」

秘め事は、なを人々の胸の内にあった。
山あいの田んぼのあぜで、ふと出会った野良帰りの主婦が、ぽつりぽつりと三百八十年前の出来事を語った。
語り終わると、背負子（しょいこ）の牧草を揺すり上げ、道を譲った私たちに深く一礼して去った。



・・・はあ、嘆願沢はこのあたり、地獄沢（写真）ならばこの奥にございます。
一村皆殺しに遭ったこと、九十二歳で死んだばあ様がよく口にしておりました。
わしらの在所は「情け知らずの岡ノ内」といわれているんだと。
助けを求めた村人を見捨てたのだそうで・・・。

惨劇の日は、慶長七年（1602年）陰暦十月十日、と伝えられる。
小生瀬村。いま茨城県最北端にあたる山里は、この日、刈り上げを祝って、早朝から華やいでいた。つじつじに響くもちつきの音。子どもたちのはやし声は、むじなっばたきだ。
わら東で、てんでんに地面を引っぱたく。豊作を喜び、祈る習わしである。

祝が盛り上がりを迎えたとき、武装集団が不意に襲った。

集落の中心は、四つつじにある。軍勢は、三方から迫った。
村人は、もう一つの道へ逃げた。
隠れていた一隊が、その前に立ちはだかった。
追い込まれた沢は、V字谷で、自然の袋小路となっていた。

無抵抗、無防備であった。
男も女も、母も子も、切り捨てられた。
首をはねられた。
沢の入り口にある岡ノ内郷の人々は、関わり合いを恐れて板戸を閉ざし、音だけを聞いた。

犠牲者の数について、同村生まれの歴史学者、肥後和夫・東京教育大名誉教授の推算がある。それによると死者は約五百人。
「近世の百姓一揆でも、これほど残酷な処分はほとんどない。」
村で生き残ったのは一人、ともいう。
(注：肥後和夫氏は、当時の大子村の庄屋、大藤嘉右衛門の子孫)

毎年十月十日、今も続く祝の炉端で、年寄りが孫子にこの「昔ばなし」をする。
肥後教授もそれを聞いて育った。
むじなっばたきの覚えもあった。
ことの真相解明を試みた。
けれど、村に残る口伝えの他に、直接文献はなかった。
願いを果たせぬまま今年二月、教授は世を去った。

惨劇の日付、年代にも異説がある。
事件のきっかけさえ、定説はない、伝承によると、年貢納めが済んだあと、また取り立ての役人が回ってきた。
偽役人だと直感した村人は、追い回し、寺の床下に隠れた一人を傷つけた。
実はそれが本物だった、という。
惨劇の二、三日前のことだった。

報復の陣頭に立ったのは、水戸藩の城代家老格の重臣、芦沢伊賀守と伝えられる。
それほどの大騒動は、しかし、水戸藩の正史に一言半句も記されていない。

事件が活字で世に出たのは明治四十年、「水戸歴世譚（たん）」が初めてである。
「水戸生瀬の百姓、徒党し法にそむき、収納の役人を打ち殺す。・・・一村の百姓残らず誅戮（ちゅうりく）」一揆騒動「生瀬の乱」として、全文三行の記述。

原典をたどると、文化年間に至って郡（こおり）奉行が聞き書きした同趣旨の一文にゆきあたる。事件から、もう二百年たっていた。「記録の空白」は、不自然なほど長い。

「一揆」の記述は、どうだろう。村の言い伝えが浮き彫りにする。祝にうかれた村人の姿には、一揆の緊迫感などどこにもない。

これは、密封された歴史ではないか。時代が動いていた。関ヶ原の戦いから二年、徳川全国制覇のそのときだ。

常陸地方では、四百数十年続いた佐竹氏が家康の不信をかい、秋田へ移封された。「ハタハタから美人まで従って行った。領民は後々まで佐竹氏の善政を慕った。移封は、事件の五ヶ月前のことである。山奥の村は、まだ二重の支配下にあったのかも知れない。

新しい政権担当者の目に、役人殺傷事件が不服従の象徴と、映ったとき、村人の運命は決まった。とはいえ無差別、大量殺戮である。

「暗黒の歴史」は、御三家・水戸徳川の名誉をかけて、いっそうヤミに押し込めなければならなかった。

ただ、嘆願沢、地獄沢と地形も地名もそのままに、自然の記念碑だけは抹殺のしようもなかった。（以上、朝日新聞記事・・・全文）

もうひとつ「地元の研究会」の記事を紹介します。

「生瀬乱」の伝承をめぐって・・・常陸太田市 野上平 10/11/23
(金砂大田楽研究会会報第22号から転載)

さて、事件の発生した地元では、現在どのように伝えられているのだろうか。ところが伝承はいくつもあって、その内容は、古い時代の伝聞記録同様、話者や引き継がれる家庭等によってまちまちなのである。そこで本稿では、一揆（いっき）研究者や郷土史家がよく引用されるという二、三の例について紹介しよう。

まず、生瀬出身の歴史学者で、古代史研究の泰斗（たいと）、肥後和男（ひごかずお）氏（1899—1981）の証言を取り上げることにする。

氏は、昭和40年に発表した随想「生瀬乱のこと」（『茨城県史研究』2号）の中で、子ども時代、家庭で聞かされた乱の話を記している。

生瀬地方では、毎年10月10日（農あげとか刈りあげと言われる祝いをする。）当日、家では餅もちをつき、子どもたちはむ・じなっぱ・たき・藁束（わらたば）を縄でぐるぐる巻きし、野球のバット状にして、先端（穂先）の細い部分を手に持ち、根元の太い部位を地面に叩きつける。

その行事にからんで、次のような話が伝えられたというのである。

昔、この日（10月10日）に小生瀬の人間が、水戸から押し寄せた侍たちに皆殺しにさ

れた。その原因というのは、秋になって年貢（ねんぐ）取立の役人が来たので出してやった。すると間もなく別の役人が来て年貢を出せという。村のものは怪しんで、こいつ偽にせものだろうということになり、それを打ち殺してしまった。

ところが実は前のが偽もので、後のが本ものであった。それで水戸から侍たちが押し寄せたのだ。そのときみんな付近の沢に集まって命乞いのちごいをしたのが今も残る嘆願沢（たんがんざわ）で、これが聞き入れられないで殺されたのが地獄沢（じごくさわ）、斬られた首を埋めたのが首塚、胴を葬ほうむったのが胴塚である。

このとき百姓は皆殺されたが、谷沢坪（やざわつぼ）の御代（みよ）新左衛門（しんざえもん）の家だけは助かった。

こうして潰滅（かいめつ）に帰した小生瀬村を再興すべく命ぜられたのが、当時大子村の庄屋をしていた大藤嘉右衛門で、それは柏原坪に落ち着き庄屋になった。肥後の家の先祖であるものは、大藤の婿（むこ）であったので、一緒に来て小生瀬復興を手伝った。

この話に続けて氏は、「それがいつのこと（いつの時代の事件）なのかは聞いた覚えはない。この話に出てくる嘆願沢や地獄沢は今もある。ことに首塚、胴塚はうちの近くだったので、そのそばを通るときは少し気味が悪かった。」と述べている。

さて、事件の様子を肥後氏の証言以上に具体的に、しかも生々しく紹介しているのが、山川菊栄（きくえ）（1890－1980）氏の（『覚書幕末の水戸藩』）である。

もっともこれは、山川氏自らが調査してまとめたものではなく、福島県塙町出身の郷土史家金沢春友（はるとも）氏（1884－1974）が現地に足を運び、聞き取りをした結果の報告である。長文になるが引用しておこう。

それによると年貢取りの役人が二度来ているので、ニセ物騒ぎになったのだが、実は初めに来た方があやしく、二度目に来た方が本物だったのを、その本物の方をスキ、クワ（を）もって追い回し、一人を殺し、他の一人は字谷沢坪という集落に今も続いている御代家にかくまわれて助かったのだという。

（ここでは一人の屍体を俵詰めにして城下まで送りつけたという話はない。）

それから一日、二日のち、10月10日の刈り上げ祝い日の当日、村中仕事を休んで隣近所寄り合って笑いさざめきながら祝い餅をついている最中、疾風のように一隊の軍勢が襲ってきた。

白刃（はくじん）一閃（いっせん）生首はうすの中にとびこみ、あたり一面血の海となり逃げまどう村民は追われ、追われて、子を抱いた母も、老いかがんだ姑（しゅうとめ）も、それをかぼう若妻も、みる見る 檜（やり）ぶすま（大勢が檜をすきまなくそろえ並べ突きつけること）に包まれたらと思うと、たちまち屍（しかばね）の山となった。

そのとき拾い集めて首をうめたのが首塚、胴を葬ったのが胴塚、多勢一つ所に追いつめ

られて手を合わせて命ごいをした所が嘆願沢、最後一人残らず斬りすてられたのが地獄沢と、惨劇の後は、今もその場所にそのまま名を残している。

南方三、四里へだてた男体山のふもとまで命がけで走り続け、そこにあったワラボッチの中にもぐりこんで危うく命びろいをした者がほんの幾人かあった。・・・ワラボッチの中にかくれて助かった人があるところから、その辺では人ボッチともいい、その名が今でも残っているという。

一家のうち、一人でも生き残った家では、これ以来、正月に門松をたてることすら遠慮して、長持の中に小松をたてて門松にかえた。

こうして一村全滅した小生瀬は、隣接する下野（しもつけ）国（栃木県）から移住した農民にひきつがれ、彼らは郷里の地名をもちこんだので、今でもこの村に 下野と同じ地名があちらこちらに残っているという。

解説：山川 菊栄（やまかわ きくえ、1890年（明治23年）11月3日 - 1980年（昭和55年）11月2日）は日本の評論家・婦人問題研究家である。柳田國男の薫陶を受け、母や故老からの聞き書きや祖父の日誌をもとに、『武家の女性』『幕末の水戸藩』などの社会史を残した。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』

山川氏が金沢氏より、この報告を受けたのは、昭和40年代半ば以降のことと思われる。しかし、山川氏は昭和12年すでに母の親戚筋に当たる旧水戸藩士からも生瀬乱について聞いている。

その内容は、肥後・金沢両氏の話と大筋では類似しているが、事件発生を慶長14年（1609）の初代藩主頼房（よりふさ）が襲封（しゅうほう）した直後のこととしている。話には、それ以上に農民と武士との身分差を感じさせる面がある。

解説：しゅうほう【襲封】諸侯が領地をうけつぐこと。大辞林 第三版

それは、二度目に年貢徴収に来村した小役人の数を二人と断定した上で、うち一人は村民に殺され、屍骸は俵詰めにされ水戸城下に送り届けられたという内容である。

城中で死骸を受け取った家老芦沢（あしざわ）伊賀守は、直ちに兵を率いて小生瀬を襲い、皆殺しを断行したとしている。

なお、もう一人の小役人は谷沢坪（やざわつぼ）御代（みよ）家に匿（かくま）われ、危うく助かったというのである。

注目したいのは、家老の決断した一村皆殺しの報復行為を正当化しようとしている点である。つまり、むごい殺し方をされた役人の屍体を俵詰めに送った農民の非常識残忍極まりない行為、新領主を愚弄（ぐろう）するような行為を許せないのは当然であるとの含みをもった伝承なのである。

武器を携えた藩兵が、丸腰の農民を多数殺戮（さつりく）した行為ではあったが、武士の道に外れていないというのであろうか。

以上、代表的な伝承内容を紹介したが、他の伝承をみても、事件発年代・月日、小生瀬再興者などについてはまちまちである。

（以上・・・「生瀬乱」の伝承をめぐって・・・からの引用）

●さて、ここから「事件の発年代」について考えます。

生瀬乱が明るみになったのは、江戸時代の後期、事件からおよそ200年を経過した文化年間（1804～1818）です。

当時水戸藩の学者であった高倉逸齋は、小生瀬村で起きた「一村皆殺し」の伝承を生瀬に関わる役人や学者仲間から情報を収集するとともに自らも現地調査を行い、水戸藩の武力鎮圧を『探求考証』の中に書き記しました。

その中で事件の起きた発年代について、慶長14年（1609）、元和3年（1617）、同7年（1621）の説が考えられるとし、明確な年代決定はできませんでした。

また、探求考証が出されてから、40数年を経た安政2年（1859）に地元の伝承としてまとめて著した水戸藩士・加藤寛齋の『常陸国北郡里間数之記きたぐんりていけんすうのき』の「生瀬乱の由来」では、事件発生を慶長7年（1602）としています。

慶長14年（1609）説「百姓一揆」

『探求考証』から

「慶長14己酉（つちのととり）年の10月10日、生瀬郷の百姓が、かねて年貢のことについて不満を持ち、徒党を組みし、出張して来る代官手代を殺そうと謀議したのをある村の名主が内報したので、芦沢伊賀が部下を引き連れてきて、これを平定した。

この時百姓に多数の死傷者が出たが、難を逃れて出奔（しゅっぽん）した者も多く、年代すら不明であるが、ただ10月10日のことと語り伝えられている。その後、役人の取締りもゆるやかになり、だんだん帰郷して百姓を継続するようになった。」

慶長7年（1602）説「錯誤による偶発的事件」

『常陸国北郡里間数之記』の「生瀬乱の由来」から

「慶長年中小生瀬村に騒乱があり、一村皆殺しとなったが記録も残らず、詳細は不明である。僅かに残る説話によれば、

この年代官所より役人と称する者が来たので年貢を完納した。

ところが、後から来た正吏と称する者が現れ、年貢を督促したので、既に納入済みの旨申し立てたが、聞き入れられなかったので、これを偽役人と判断し、殺してしまった。

すると、慶長7年壬寅（みずのえとら）10月9日の夕方、水戸から征将が手勢を率いて小生瀬村を襲い、老若男女を問わず打ち捨てにされた。

その後、当庄屋大藤雄之介の先祖嘉衛門が、太子村から移住して村の復興に従事した。」

●事件の規模について、

「小生瀬村の住民は、どのように成敗されたのか」についてみると、

高倉の慶長14年説は死傷した者が多くありましたが、出奔して潜居（せんきょ）した者も多く、これらは後日帰村して百姓を継続したとしています。

元和3年説では、芦沢伊賀守が部下を引率して出向き追討したとあり、元和7年説は、隣接の高柴村岡の内の深沢に逃げ込んだ者は、残らず成敗されたとあります。

加藤の慶長7年説では、「一瞬の間に村中一千有余人のもの夕の露もろともに消失けるとなり。」とあり、一村皆殺し説をとり、高倉説とは相違しています。

当時、小生瀬村は、戸数は100戸～150戸、文化年中149戸。人口は一世帯平均5人として500人～750人（推定）として、一千人有余人が皆殺しにあったということは疑問があります。

それにしても、伊奈備前守が命令し、芦沢伊賀守が部下を引率しての一村成敗であり、大勢の水戸藩兵（約150人ともいわれる）が逃げまどう農民を斬り殺しながら地獄沢に追い詰めての農民虐殺であったといえます。

大勢の農民が逃げ込んで皆殺しにされたといわれる岡ノ内坪の深沢が、現在も地獄沢という正式な地名が残っています。

また、命乞いをした入口付近を嘆願沢、沢の中程で血の付いた刀を洗った場所を刃拭き沢、斬られた者の首を埋めた首塚、胴を埋めた胴塚などの呼称が残っています。

●ここで、もう一度内容を整理してみますと、

●第一の謎は、

その時期が、慶長7年（1602）から元和7年（1621）まで様々な説がありはっきりしないこと。ただ事件があった日は、なぜか旧暦10月10日とされており、このことについては特に異論がありません。

この時期がいつかという問題は、なぜ彼らが為政者（いせいしゃ）すなわち水戸徳川家と戦ったのかを検証する上で非常に重要な意味を持ち、佐竹氏が秋田に移封された1602年か、幕藩体制が安定した1621年かでは、この事件が現代の我々に対して持つ意味が大きく変化します。

時代が下がれば下がるほど、単なる年貢等のトラブルによる徳川時代にどこにでもあった一揆の様相が強くなり、早ければそれだけ別の要素が強くなると思われます。

飯嶋和一氏が事件を題材にした「神無き月十番目の夜」（河出書房）を発売されています。同氏は、生瀬一揆衆は自らの信仰と文化を守るため、新たなる為政者（いせいしゃ）に対して戦ったのだとの立場で、そのため佐竹氏が秋田に移封された直後の1602年発生説をとっています。

解説：飯嶋 和一（いいじま かずいち、1952年12月20日）は、小説家。ジャンルは主に歴史小説。（『神無き月十番目の夜』河出文庫1999年 以下に小説の一部より転記）

検地は、小生瀬村の「盆」のときに実施されます。先祖の霊たちが村に帰ってくる「聖なる時間」は、検地をする側にとって、まったく意味を持ちません。さらに「御田」という、他の田畑とはまったく意味の違う、小生瀬の人々にとって「聖なる空間」は、役人の目からすれば1枚の「円形の田」でしかなく、むしろ「隠田」として処罰の対象にさえなるものです。小生瀬の「聖」は彼らによって否定されていきます。

●第二の謎は、

このような事態を生じる事になった原因は何かと言うことです。

通説では、年貢徴収役人を誤って殺してしまった事が原因であるとされ、またある説では検地にかかるトラブルが原因であるとされているがはっきりしません。

ただ、一つの村が老若男女を問わず子供まで皆殺しにされるほどに、時の為政者（いせいしゃ）水戸徳川家との間に険悪化した事態を生じた事だけはあったと思われれます。

●第三の謎は、

なぜ村民がこうなる前に逃げ出さなかったのかと言うことです。

戦国時代には、全村逃散（ちょうさん）という逃げの一手もあり得たはずであり、また、小生瀬の土地を歩いた人は、この村が深い森と山に囲まれ、しかもかなり広い面積をである事がわかると思います。

そして四方の峠口から攻撃されたとしても、寄せての数は村民を超える数とは想像し難く、しかも他所から来たばかりで地元の地理にあまり詳しくない軍勢では、地域の生活者の村民が、周囲の山や森から隣接する村や町に逃げ出す事を阻止するのは容易ではないと直ぐに判断出来ると思われれます。

にも関わらず、村民は村の中心部に比較的近くて発見されやすいと思われる、しかも行き止まりで逃げ場が無い地獄沢（この事件後この谷はそう呼ばれています）にあえて集団で逃げ込み、そしてそこで全滅したと伝えられています。

解説：逃散（ちょうさん）・・・中世及び近世、農民が領主の誅求（ちゅうきゅう）に対する反抗手段として他領に逃亡すること。広辞苑第六版。

地獄沢絵図（常陸国北郡里程間数之記：国立国会図書館蔵）



●そして最後の謎は、

この事件が、なぜ長い間、公私の記録に留められることなく、歴史の谷間に400年間も沈んでいたのか。

そしてそれにも係わらずなぜ完全には忘れ去られず、周辺の人々に伝承として語り継がれたのか、どこに周辺の人々の共感と同情を呼び起こし、代々語り継がれたのかという謎です。

この事件の謎を考えるに当たっては、

まず第一に徳川家は（武田、松平も含み）この地域では外様だったという事を抜きにしては考えられません。その上で全滅という最悪の状態を、なぜ避けられなかったかという問いを考える時、可能性としては三通りあると思います。

●まず第一の推論としては、

村民が為政者（いせいしゃ）側の怒りや思惑を知らず、徳川勢の攻撃を全く予想しない状況で突然の不意打ちを受け、全滅したということが想定されます。

この推論が成り立つ時期は、数百の戦支度の軍勢が、水戸から小生瀬までの約50キロの道を数日かけて移動しても、特に目立つことなく怪しまれない時期、すなわち 佐竹氏移封直後の混乱期の1602年旧暦10月10日が最も可能性が高いと考えられます。

しかし、この時代の村々は、決して無防備の単一集落ではなく、時の為政者（いせいしゃ）の暴力に対しそれなりに村落同士のネットワークや対応策を備えた集団であり、そのような村が何の情報も入手出来ず、対応もなく全滅するというような状況は想定が難しいと考えます。

佐竹氏が移封されたのがこの年の5月、事件が起きたのが10月（旧暦）であり、年貢や検地を巡ってこの数ヶ月間に村が水戸徳川と悶着を起こしていたとすれば、村は緊張状態にあり水戸徳川勢の動きには当然注意を払うと考えられるからです。

そして、この地域が、「依上保（よりがみほ）」と呼ばれ、歴史的に争乱の地という背景を持った地域であることを考えれば、当然そのような戦の臭いには敏感であるはずであり、為政者（いせいしゃ）の徹底的な報復を招くような事態を引き起こしながら、その認識がないということはほとんど考えられないため、不意打ちによる全滅の可能性は少ないと考えられます。

解説：「大子町は、もと陸奥国白河郡に属し、「倭名類聚鈔」の白河郡17郷のうち、八溝山東南の地で、10世紀前半には既に「依上郷」として成立しました。

また、八溝黄金神の鎮座する八溝山の東南の久慈郡依上では平安時代に砂金を採り南北朝・室町時代にも砂金を産したとの記録があります。

その後、「依上保（よりがみのほ）」と呼ばれました。」

永正七(一五一〇)年佐竹氏が結城氏の内紛に乗じて奪回して常陸国となりました。」

●第二の推論としては、

村民が圧倒的に不利な状況を承知の上で覚悟を決め、あえて勝ち目のない戦を挑み、自らの何物かを守って全滅していったと言う推論です。

この考え方の根底には、この村は当時、陸奥の国白川郡依上保（よりがみほ）と呼ばれた地域に属し、結城氏、佐竹氏、伊達氏の勢力争いの舞台となって戦乱が絶えず、そのため、通常の村よりも独立心の強い半農半士集団として、独自の文化を保有するようになったのではないかと考えられます。

この推論に従うとすると、事件の発端には、為政者（いせいしゃ）の統治に郷士（又は独立農民）として受け入れがたい何かがあり、彼らは武士（又は独立農民）の誇りの示すところに従い、抵抗したのではないかと考えることができます。

この場合の一揆の発生時期については、佐竹氏の移封から数年以内の早い時期に起きた可能性が高いと考えるのが妥当だと思います。

その理由は、こうした場合、村と為政者（いせいしゃ）側との軋轢（あつれき）が佐竹氏移封後の数年間で年貢や検地の実施などにより高まって行ったとの想定が自然であり、為政者（いせいしゃ）がどうあっても、村人たちにとって価値あるものを保有することを許さないと言うことがはっきりした段階で、未だ戦国の荒々しい気質が残る村人達が爆発したのでは無いか。

そのために徹底抗戦して全滅も辞さなかったのではないかと考えられます。

●三つ目の推論としては、

前述の飯嶋氏の説になりますが、同氏は上記の歴史的なものを背景にした上で、独立精神の旺盛な村が、水戸徳川家相手の戦に勝算が有るとの誤った判断の下、この地域に生きてきた民として、自らの信仰や文化を為政者（いせいしゃ）に認めさせるための戦いを行い、敢え無く敗北していったとの立場で、時期は、まだ水戸徳川家の力や性格が読めなかった混乱期の1602年説をとっています。

●これらの検討から、次のように考えられます。

村が水戸徳川方との一戦を全滅することを承知の上で行ったものではないか。

農民達は、もとより全滅を覚悟の上での抵抗であるため戦闘は激しいものであったと思われれます。そして、まるごし（武器を持たない）の農民と油断した水戸徳川方が、もし手痛い反撃を受け、損害を被ったとすれば、面目上、その失態を伏せる必要があったのではないかと思われれます。そのため、この事件の記録が何も残されなかった。

そしてこのように凄惨な「村人の皆殺し」となったのは、予想以上の反撃を受け被った傷の恨みを晴らすためと口封じに行ったと考えなければ、理解し難く、それは、新しい政権担当者の目に、役人殺傷事件が不服従の象徴と、映ったとき、村人の運命は決まっていた。と言えるかもしれません。また水戸家は「見せしめ」と考えていた可能性があります。しかし、「やりすぎた」とも考えていたことも確かだと思われれます。そのため、何も記録を残さなかったのではないのでしょうか。

郷土や農民達の覚悟ある戦いぶり、更にその最後が凄惨なものであった事で、周辺の人々の記憶に刻まれ、そして外様の為政者（いせいしゃ）である水戸徳川家よりも、佐竹氏を慕う地域柄から、この事件に対する同情は「情け知らずの岡ノ内」などと言う言葉と共に、深く長く、記録が残されないまま依上保の人々の記憶の中に浸透し、伝承として残ったのではないのでしょうか。

なお、その時期は前記の理由から、佐竹氏移封後2年たった慶長9年（1604年）もしくは慶長10年（1605）頃ではないかと思われれます。

徳川家の状況からしても、慶長7年11月に水戸領主となった武田信吉（家康の5男）は、慶長8年に水戸で病没し、その後を徳川頼宣（家康10男）が継ぎますが、水戸領内4家老の内紛などがあつたりして、慶長9年の水戸領内は騒然とした雰囲気があったものと想像されます。そして、慶長10年頃になると新たな当事者徳川家の統治の方針がはっきりしてきた時期であろうと思われれます。

この小生瀬村の一揆による惨劇は、受け入れ難い抑圧と為政者（いせいしゃ）側の混乱に乗じての村人の反乱であったと言えるのではないのでしょうか。（了）

「資料編」

●歴代藩主

武田（松平）家
親藩 - 15 万石
武田信吉（家康の五男）
天正 11 年（1583 年）9 月 3 日、
徳川家康の五男として浜松で生まれる。

徳川（紀州）家
親藩 - 20 万石→25 万石
徳川頼宣（家康の十男）
慶長 7 年 3 月 7 日（1602 年 4 月 28 日）、
伏見城にて生まれる

徳川（水戸）家
親藩 - 25 万石→28 万石→35 万石
※1636 年（寛永 13 年）7 月以前は松平姓

1 徳川頼房（頼宣の同母弟で、家康の十一男 1603 年（慶長 8 年）8 月 10 日、伏見城で生まれる）

2 徳川光圀（徳川頼房の三男 寛永 5 年（1628 年）6 月 10 日 水戸城下柵町で生まれる）

3 徳川綱條

4 徳川宗堯

5 徳川宗翰

6 徳川治保

7 徳川治紀

8 徳川齊脩

9 徳川齊昭

10 徳川慶篤

11 徳川昭武

●水戸藩は、体面維持で背伸びをしていた。
「朝日新聞 特集：日本史の舞台より」

将軍職の継承権を持つ御三家は、徳川の天下統制策の一つだったが、尾張、紀伊、と比べて水戸藩はその体面を保つのに背伸びしていた。

他の二藩と違って江戸常詰めは国元との二重生活の負担を増し、二代目光圀の始めた大日本史の編纂費用も財政を圧迫した。

他方、三家の中では極端に低い禄高の名目的な追加を求め、のちに「水戸三十五万石は上げ底」と笑われた。

そのひずみは、他藩に例を見ない重課となって領民にのしかかった。と考えられています。

hiroshi.ishiyama のページ「日本古代史の謎」もご覧ください。
<http://www.asahi-net.or.jp/~wy4h-isym/index.html>



●依上保「陸奥の国白川郡依上保（よりがみほ）」とは

南北朝期から見える保名高野【たかの】郡のうち当保は「和名抄」の依上郷のあたりに成立したものと推定される。

建武元年(1334 南朝) 3月18日の後醍醐天皇綸旨案に「当国依上保令知行、御年貢無懈怠司令致御沙汰者」とあるのが初見（結城文書／県史7）。

鎌倉幕府滅亡後、没収地となった当保は建武新政府の重要な料所となり、陸奥国司である北畠顕家に年貢沙汰を命じており、顕家の管理するところであった。

同年4月16日の陸奥国宣案によれば顕家は、当保の年貢徴収を結城宗広に委任している。（同前）これは宗広が当保の奉行であったからである。

建武2年(1335 南朝) 10月5日の後醍醐天皇綸旨によれば「陸奥国依上保・金原保、白河庄内金山郷等」が勲功賞として結城親朝に安堵され（秋田藩家蔵白川文書／県史7）同年10月26日の陸奥国宣案で親朝は当保などの検断奉行に任ぜられている。（結城文書／県史7）

康永3年(1344 北朝) 9月24日の結城正文目録によれば、当保は不知行所領となっており（同前）散在所領は手継証文を有するのみで所領の維持が困難になっている。

応永30年(1423) 9月30日の足利持氏預ケ状によれば「陸奥国依上保〈佐竹依上三郎跡〉」を料所として結城氏朝に預け置かれている。（遠藤白川文書／県史7）

また永享2年(1430)正月11日の結城氏朝寄進状によれば「依上保内山田村内西堂かきよ分銭七貫文」が近津宮に寄進されている。（八槻文書／県史7）

その後永正7年(1510)、佐竹氏は当保を白川結城氏の内紛に乗じて奪回している。（県史1）

同8年8月3日の依上保目録には24か村が見える。（八槻文書／県史7）

現在の茨城県久慈郡大子町を中心とした地域で、福島県では塙町の一部が含まれる。

水戸藩

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

水戸藩邸跡石碑（京都市上京区下長者町通烏丸西入北側）

水戸藩 親藩 35万石の位置（日本内）水戸藩 親藩 35万石水戸藩

親藩

35万石

水戸藩の位置

水戸藩（みとはん）は、常陸にあって現在の茨城県中部・北部を治めた藩。藩庁は水戸城（水戸市）に置かれた。

目次

- 1 藩史
 - 1.1 水戸徳川家以前
 - 1.2 水戸徳川家時代
- 2 歴代藩主
- 3 支藩
- 4 家老
- 5 藩校
- 6 藩邸
- 7 幕末の領地
- 8 備考
- 9 脚注
- 10 参考文献
- 11 関連項目

藩史

水戸徳川家以前

常陸は佐竹氏が豊臣秀吉によって支配をそのまま認められていたが、関ヶ原の戦いの際に佐竹義宣は徳川方に加担しなかったため、慶長7年（1602年）に出羽久保田21万石に減転封された。

佐竹氏の後、水戸城には下総佐倉藩より徳川家康の五男松平（武田）信吉が15万石で入ったが、翌1603年に信吉は21歳で病死した。信吉の死により翌月、家康の十男で当時2歳の長福丸（徳川頼宣）が新たに20万石で水戸に入封する。1604年、5万石の加増を受け25万石となる。1606年、頼宣は元服した際に常陸介に叙任されているが、1609年に駿河・遠江・東三河（駿府藩）50万石を与えられて転封し、1619年には紀州藩55万石に転封した。頼宣は紀州徳川家の祖となった。

頼宣は2歳から8歳まで水戸藩主であったが、この間一度も水戸に入っておらず、駿府にて家康の膝元で過ごしたといわれている。実務は財政面を蘆沢信重が、行政面を関東郡代伊奈忠次が執った。1607年（1602年、1615年とも）の秋に、小生瀬村（現：太子町小生瀬）で、年貢を巡る農民と藩役人の行き違いにより、藩が小生瀬村の住人を皆殺しにする事件が起こった（生瀬騒動）。藩の役人が年貢を取りに来て農民は納めたが、また別の役人が年貢を取りに来たこと（年貢の二重取り）に対して怒った農民たちが、後から来た役人を偽物と判断してその一人を殺害した。これに対し10月10日、蘆沢信重が藩兵を出兵させて生瀬村の農民を皆殺しにしたという。この事件に関しては、藩の公式記録には一切触れられず、伝承と関連した地名が残るのみである。

水戸徳川家時代

「水戸徳川家」も参照

頼宣のあとに、頼宣の同母弟である家康の十一男で当時6歳の鶴千代丸（徳川頼房）が下総下妻藩より25万石で入った。頼房以降の藩主家を水戸徳川家と呼ぶ。頼房も頼宣と同様に、幼少年時は水戸に赴かず駿

府・江戸にあり、1619年に初めて水戸に入る。1622年、3万石を加増され28万石となる。のち3代藩主綱條時代の1701年、新田開発の分を含めるとして表高を35万石に改めたが、この高直しはかなり無理があったようである。

水戸藩は徳川御三家の中でも唯一参勤交代を行わない江戸定府の藩であり、万が一の変事に備えて将軍目代の役目を受け持っていたともいわれている。そのため、水戸藩主は領地に不在のまま統治を行わねばならず、物価の高い江戸生活、江戸と領地の家臣の二重化などを強いられた上、格式を優先して実態の伴わない石直し（表高改訂）を行ったため、内高が表高を恒常的に下回っていた。幕府に対する軍役は表高を基礎に計算され、何事も35万石の格式を持って行う必要性があったため、財政難に喘ぐこととなった。

頼房は事情により三男の光圀を継嗣とし、長男の松平頼重は讃岐高松藩12万石を与えられた。光圀は学問を好み、『大日本史』の編纂を開始し、水戸藩に尊王の気風を植え付けた。水戸藩で生まれた水戸学は幕末の尊皇攘夷運動に強い影響を与えた。

3代藩主綱條は、宝永2年に浪人の松波勘十郎を登用して財政改革を実施したが、宝永6年（1709年）の百姓一揆で3000人ももの百姓が江戸へ出て様々な集団的示威行動を取ったため、やむなく年貢増徴の撤回や松波の罷免を行い、改革は挫折した[1]。宝永の改革に失敗し、4代藩主宗堯が短い期間の統治で没し、5代藩主宗翰が幼少で水戸藩を継承したおりに、8代将軍徳川吉宗により付家老中山信昌ほかの水戸家の重臣が呼び出され、幼君の輔育と一和忠勤を直接命じられた。さらに、吉宗以降に御三家の幕府による統制が強化される中、寛延2年には、御連枝（支藩の藩主）の松平頼寛（陸奥守山藩）と松平頼済（常陸府中藩）が老中堀田正亮の役邸に呼び出され、財政改革の実施を命じられた。このため宗翰は宝暦の改革と呼ばれる藩政改革を実施し、太田資胤に命じて財政再建を進めたが、宝暦6年に資胤が致仕すると頓挫した。安永7年には、幕府が再び水戸藩の家老に直接細かい指示を与えて財政再建を命じた。6代藩主治保は幕命に従って儉約に努め、藩主就任以来24年ぶりにお国入りを果たして寛政の改革に乗り出したが、天明の大飢饉によって財政はさらに悪化した。

尾張藩、紀州藩が藩主の血統断絶、幕府からの財政援助、独立志向の附家老による幕府統制への迎合などにより、御三卿や将軍家から藩主を迎えたのに対し、水戸藩では支藩からの養子により藩祖の血統を守った。継嗣なく死去した8代藩主斉脩の後継問題では、清水家から恒之丞（徳川齊彊）を養子に迎えようとする派閥と、藤田幽谷の門人らを中心とした藩祖血統の維持派が対立し、斉脩の三弟である斉昭が家督を継いだ。

9代藩主斉昭は藩政の改革と幕政への参加を志し、藤田派を中心に人材登用を行うとともに、藩内の保守派の中心となり幕府との連携を果たそうとする付家老の勢力を削ぐため、一般家臣と同じ知行制に組み込んだ。財政を圧迫した藩主と付家老の江戸定府制度についても、1年ごとの交代制に改めた。教育改革についても弘道館を建設して整備を行い、水戸学が藩論に強い影響を与えることになった。しかし、強い尊王攘夷傾向のため幕府に疎まれ、長男の慶篤に家督を譲って隠居を余儀なくされた。また斉昭は、財政難の中で新規召し抱えを行ったため、藩財政は窮乏を極めた。斉昭の隠居後には改革派の藤田東湖らも免職・蟄居となった。

10代藩主となった慶篤は、3連枝（高松藩主松平頼胤、守山藩主松平頼誠、府中藩主松平頼繩）の後見のもとで藩政を行った。なお、15代将軍徳川慶喜は慶篤の実弟であるが、御三卿の一つ一橋家を継いでから将軍になった。斉昭には他にも多くの男子があり、親藩・外様を問わず多くの藩に養子に出されている。

水戸藩は幕末には斉昭が存在感を示したものの、藩内では保守派（諸生党）と改革派（天狗党）の抗争から統制を失い、藩士による桜田門外の変、天狗党の乱、弘道館戦争を招くとともに、藩論統一と財政難を克服することができず、幕末政局で主導権を握ることができなかった。

水戸藩領は廃藩置県により、水戸県を経て、茨城県に編入された。

歴代藩主

武田（松平）家

親藩 - 15万石

武田信吉

徳川（紀州）家

親藩 - 20万石→25万石

徳川頼宣

徳川（水戸）家

親藩 - 25万石→28万石→35万石 ※1636年（寛永13年）7月以前は松平姓

徳川頼房

徳川光圀

徳川綱條

徳川宗堯

徳川宗翰

徳川治保

徳川治紀

徳川齊脩

徳川齊昭

徳川慶篤

徳川昭武

支藩

水戸藩には頼房の子を藩祖とし、いざという時に本家を継承する支藩（当主が御連枝と呼ばれる）が4家（四連枝）あった。

讃岐高松藩 - 松平讃岐守頼重（徳川光圀の兄）を祖とする。高松城に居城を置く。溜間詰。

陸奥守山藩 - 松平刑部大輔頼元を祖とする。1661年（寛文元年）に2万石を与えられ、常陸額田に陣屋を置いたのに始まる。1700年（元禄13年）に2代大学頭頼貞が陸奥守山転封となり、以降明治維新まで続く。代々の当主は、連枝大名として大広間に詰めた。また、江戸定府として参勤交代は行わなかった。極官は従四位下侍従であり、代々の当主は嫡子のうちに従四位下に任官し、家督相続後に侍従に昇進している。

常陸府中藩 - 松平播磨守頼隆を祖とする。1661年（寛文元年）に2万石を与えられ、常陸保内に陣屋を置いたのに始まる。1700年（元禄13年）に同国府中に陣屋を移す。守山藩と同様、大広間詰め連枝大名、江戸定府であった。官位の格も守山家と同じである。

常陸宍戸藩 - 松平大炊頭頼雄を祖とする。1682年（天和2年）に1万石を与えられ、常陸宍戸に陣屋を置いたのに始まる。連枝大名であるが、1711年（正徳元年）に2代筑後守頼道が譜代に列せられ帝鑑間詰となってより、幕府からは譜代大名として遇せられる。官位は従五位下。

家老

中山家 - 松岡城2万5千石（茨城県高萩市）；附家老、維新後男爵

山野辺家（1万石） ※戦国大名・最上氏の子孫・義観より助川海防城主

山野辺義忠（最上義光の四男） - 義堅＝義清－義達－義胤＝義風＝義質－義観－義正＝義芸

鈴木（石見守）家（5000石→4500石） ※三河豪族・井伊谷三人衆・鈴木重時の子孫

鈴木重好-（重辰）（安中藩家臣） - 重政－重賢－重道－好賢－重安－重郷－重矩－重棟

松平家（3000石・藩主一門） ※家老格、頼讓より長倉陣屋に移住、維新後士族

松平頼泰（頼房の八男）－頼福－頼匡－頼忠－頼脩＝保福（宗翰の八男）－頼紹－頼善＝頼位＝頼議＝頼寧＝頼功＝頼遵

太田家（2000石） ※里見氏旧臣。初代頼房の准母英勝院の一門

太田正重－資正－資真――学＝資富＝資胤－資厚＝資敬＝資原－資春－資信

鈴木（雑賀）家（3000石→600石） 称:雑賀姓

鈴木重朝－重次＝重義（頼房の十一男）＝雑賀重春－雑賀重護－重教－重堅－重明－重孚

宇都宮家（1000石）下野宇都宮氏の子孫。墓所は先祖と同じ下野国益子にある。

宇都宮隆綱 - 宏綱 - 壽綱 -

藩校

弘道館

藩邸

上屋敷：文京区後楽（現在の小石川後楽園、東京ドーム、後楽園遊園地）

中屋敷：台東区池之端（現在の東京大学本郷地区キャンパス浅野地区[2]）

下屋敷：墨田区向島（現在の隅田公園[3]）

京屋敷：京都市上京区下長者町通烏丸西入北側[4]

蔵屋敷：大阪市北区中之島（現在の日本銀行大阪支店[5]）

幕末の領地

常陸国

那珂郡 - 127 村

久慈郡 - 141 村

茨城郡のうち - 115 村

多賀郡のうち - 34 村

鹿島郡のうち - 6 村

行方郡のうち - 25 村

新治郡のうち - 14 村

下野国

那須郡のうち - 16 村

明治維新後に、茨城郡 21 村（幕府領 6 村、旗本領 17 村）、新治郡 1 村（旗本領）、相模国三浦郡 1 村（寺社領）、鎌倉郡 11 村（寺社領 6 村、幕府領 5 村、旗本領 2 村）、天塩国苫前郡、天塩郡、中川郡、上川郡、北見国利尻郡が加わった。なお相給も存在するため、村数の合計は一致しない。

備考

関ヶ原の戦いの結果、佐竹家は秋田へ転封されるにあたって水戸の美女を根こそぎ連れていったと俗説されるが[要出典]、これは秋田の都道府県別日照時間が日本で最も低い[6]ため色白の者が溢れているように見えたことから、左遷の合理化で流された無根拠の謬説と捉えるのが妥当である[7]。

脚注

[ヘルプ]

^ 深井雅海『綱吉と吉宗』2012年、吉川弘文館

^ 東京大学本郷キャンパス浅野地区の史跡，東京大学総合研究博物館，2018年4月8日閲覧

^ 特別展・将軍が撮った明治のすみだ 小梅水戸邸物語，墨田区，2018年4月8日閲覧

^ KA010 水戸藩邸跡，京都市歴史資料館情報提供システム「フィールド・ミュージアム京都」，2018年4月8日閲覧

^ 日本銀行大阪支店のあゆみ，日本銀行大阪支店，2018年4月8日閲覧

^ 気象庁。2014年3月閲覧。

^ 遺伝学的に、美女の遺伝子（X染色体）を女兒しか受け継がないなどということは考えられないため。美女の母を持つ水戸の男性が美女の遺伝子（X染色体）を後世に伝えたはずなので「美女を根こそぎ連れて

行った」ことは生物学上ありえず、明らかに事実ではない。また十分に多い水戸の総人口及び転封時の構成人数から考えても、佐竹家臣団が水戸の美女を取りこぼしなく募って全員移民させる事は当時の交通網では限りなく不可能でもある。

参考文献

山川菊栄『覚書 幕末の水戸藩』（岩波文庫、1991年） ISBN 4-00-331624-X

瀬谷義彦・鈴木暎一『流星の如く 幕末維新・水戸藩の栄光と苦境』（日本放送出版協会、1998年） ISBN 4-14-080347-9

高橋裕文『幕末水戸藩と民衆運動 尊王攘夷運動と世直し』（青史出版、2006年） ISBN 4-921145-30-X

乾宏巳『水戸藩天保改革と豪農』（清文堂出版、2006年） ISBN 4-7924-0618-8

長山靖生『天下の副将軍 水戸藩から見た江戸三百年』（新潮選書、2008年） ISBN 978-4-10-603606-4

関連項目

ウィキメディア・コモンズには、水戸藩に関連するカテゴリがあります。

水戸黄門（創作）

彰考館

水府系纂

常磐共有墓地

酒門共有墓地

回天神社

水戸の三ばい

水戸藩に関連する武術流派

北辰一刀流玄武館

新田宮流

神道無念流

真之真石川流

先代：

（常陸国） 行政区の変遷

1602年 - 1871年（水戸藩→水戸県） 次代：

茨城県

[隠す]

表話編歴

江戸時代末期から廃藩置県までに存在した藩（1867年 - 1871年）

北海道地方

松前藩（館藩）

日本地図

東北地方

黒石藩弘前藩八戸藩●○盛岡藩（白石藩 → 盛岡藩）盛岡新田藩（七戸藩）一関藩久保田藩（秋田藩）秋田新田藩（岩崎藩）亀田藩本荘藩★矢島藩出羽松山藩（松嶺藩）仙台藩鶴岡藩（大泉藩）新庄藩○長瀬藩（大網藩 → 龍ヶ崎藩）天童藩○山形藩（朝日山藩）上山藩米沢藩▲米沢新田藩（米沢藩）○福島藩（重原藩）二本松藩○会津藩（斗南藩）中村藩三春藩○守山藩（松川藩）磐城平藩湯長谷藩泉藩○白河藩（棚倉藩）

関東地方

沼田藩館林藩伊勢崎藩前橋藩高崎藩安中藩●吉井藩七日市藩小幡藩大田原藩黒羽藩○高德藩（曾我野藩）●喜連川藩烏山藩宇都宮藩壬生藩吹上藩佐野藩足利藩水戸藩穴戸藩笠間藩★松岡藩下館藩下妻藩常陸府中藩（石岡藩）★志筑藩土浦藩○谷田部藩（茂木藩）牛久藩麻生藩結城藩古河藩関宿藩高岡藩小見川藩多胡藩佐倉藩生実藩鶴牧藩●請西藩一宮藩大多喜藩久留里藩飯野藩佐貫藩安房勝山藩（加知山藩）館山藩●船形藩○岡部藩（半原藩）忍藩岩槻藩川越藩金沢藩（六浦藩）荻野山中藩小田原藩

北陸・甲信地方

村上藩黒川藩三日市藩新発田藩村松藩三根山藩（峰岡藩）与板藩●長岡藩椎谷藩高田藩糸魚川藩（清崎藩）
飯山藩須坂藩松代藩上田藩小諸藩岩村田藩●田野口藩（竜岡藩）松本藩諏訪藩高遠藩飯田藩富山藩加賀藩
（金沢藩）大聖寺藩越前勝山藩大野藩丸岡藩福井藩鯖江藩●敦賀藩（鞠山藩 → 小浜藩）小浜藩

中部地方

○沼津藩（菊間藩）○小島藩（桜井藩）★駿河府中藩（静岡藩）○田中藩（長尾藩）○相良藩（小久保藩）
○掛川藩（柴山藩 → 松尾藩）○横須賀藩（花房藩）○浜松藩（鶴舞藩）★堀江藩三河吉田藩（豊橋藩）田
原藩岡崎藩西大平藩挙母藩刈谷藩西端藩西尾藩★犬山藩尾張藩（名古屋藩）苗木藩岩村藩郡上藩高富藩加納
藩大垣藩大垣新田藩（野村藩）★今尾藩●高須藩（名古屋藩）

近畿地方

長島藩桑名藩菟野藩神戸藩伊勢亀山藩津藩久居藩鳥羽藩宮川藩彦根藩山上藩西大路藩水口藩○三上藩（吉見
藩）膳所藩●大溝藩淀藩柳生藩郡山藩小泉藩柳本藩芝村藩★田原本藩櫛羅藩高取藩紀州藩（和歌山藩）★紀
伊田辺藩★紀伊新宮藩峰山藩宮津藩丹後田辺藩（舞鶴藩）綾部藩山家藩福知山藩柏原藩篠山藩園部藩丹波
亀山藩（亀岡藩）三田藩高槻藩麻田藩尼崎藩丹南藩●狭山藩伯太藩岸和田藩豊岡藩出石藩★村岡藩★●福本藩
（鳥取藩）三草藩小野藩明石藩安志藩山崎藩三日月藩林田藩龍野藩姫路藩赤穂藩

中国地方

鳥取藩▲鹿奴藩（鳥取藩）▲若桜藩（鳥取藩）松江藩広瀬藩母里藩●津和野藩岡山藩津山藩勝山藩（真島
藩）鶴田藩浅尾藩庭瀬藩岡田藩足守藩新見藩備中松山藩（高梁藩）★成羽藩岡山新田藩（鴨方藩）岡山新田
藩（生坂藩）福山藩広島藩▲広島新田藩（広島藩）山口藩★岩国藩●徳山藩（山口藩）清末藩長門府中藩
（豊浦藩）

四国地方

高松藩●丸亀藩●多度津藩徳島藩土佐藩（高知藩）▲土佐新田藩（高知藩）西条藩小松藩今治藩伊予松山藩
新谷藩大洲藩伊予吉田藩宇和島藩

九州地方

○小倉藩（香春藩 → 豊津藩）小倉新田藩（千束藩）中津藩杵築藩日出藩森藩府内藩臼杵藩佐伯藩岡藩延岡
藩高鍋藩佐土原藩飫肥藩福岡藩秋月藩久留米藩柳河藩三池藩蓮池藩佐賀藩小城藩唐津藩平戸藩▲平戸新田藩
（平戸藩）鹿島藩大村藩島原藩福江藩▲富江藩（福江藩）対馬府中藩（厳原藩）○▲熊本新田藩（高瀬藩
→ 熊本藩）熊本藩▲宇土藩（熊本藩）人吉藩薩摩藩（鹿児島藩）

関連項目

藩の一覧 - 廃藩置県 - ★琉球藩

藩庁の置かれた地域を基準に分類しているが、他の地方に移転している藩もある。順番は『三百藩戊辰戦争
事典』による。

明治期の変更：★＝新設、●＝廃止、○＝移転・改称、▲＝任知藩事前に本藩に併合。（）内は移転・改
称・併合後の藩名。（）のないものは県に編入。

カテゴリ：水戸藩藩常陸国の藩下野国の藩甲斐武田氏紀州徳川家水戸徳川家茨城県の歴史水戸市の歴史